

鏡の前で

著者	富田, 宗一
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 7 0
ページ	3 8 - 5 0
発行年	1919-05-20
URL	http://hdl.handle.net/2298/6481

「兄さんも、そうかも知れんと思つたよ」

女には、女の觀察眼が有る。敏いものだと思つた。和春の海岸に、養生に來てゐる、ヒステリー症の若い女。詩にも、歌にもなるかも知れぬけれど、自分には其麼能は無い只昨夕の出來事が復今度は、一種滑稽味を帯びて、頭に浮んだ。

鶯が頻りに啼く。春は悠久にして限りが無い様な氣がした。無限春風恨未消。散殘りの櫻が風に散つた。

(大正八年四月)

鏡の前で

文科 富田宗一

それも恰ど若葉の繁つた此頃のことだつたちやありませぬか、庭の青葉が廊下の板にうつすりと映つてすが／＼しい朝の光を浴びながら、あなたが鏡臺を縁に持ち出して、さうして、驚きましたね、あのあなたの漆のやうな潤澤な髪の毛を染めてゐらつしやつたのぢやありませぬか、あなたも随分吃驚したと見て顔の色がすつかりなくなりましたね、軽い浴衣だつたと思つて居りますが、その上に細い腰帶を巻き付けて余念なく鏡臺に向つてゐらつしたその可愛い姿がすつくと立ち上つて、朝日を横に受けながら蒼々と茂つた芝蘭の前に浮き出たやうに、此方向き直つた時には、あなたの顔に異様な緊張がありましたね、その上に何うしたと云ふのですか、今迄念入れて梳つてあつたその髪の毛をさも倦き／＼したと云ふ風に後に投げやつた。

その髪の毛が秩序もなく後から前にしたれかゝつて、あなたの蒼い顔が半分その中に隠れて居つた、あゝその時のその色のいやなこと、私が始めて眞實を知つた其の時のあなたの髪の毛は此の上ない不快なものでした、赤と青と一緒にしてそれから褐色の中に漬けて上げて乾かした時の色、その色から立ち登る陽炎が吾等を襲つて嫌惡と不安に昏倒させる、それがあなたの髪の毛です、僕は辛うじて立つて居ました、と突然それが動き出した、いやいやそれが只の動き方ぢやないのです、風に靡いて髪が揺れる、それは綺麗でせう、あなたの怒りと悲しみとで心から動いたとすれば僕は寧ろもつと落着いた氣分にもなれたでせう、それがね、僕だけにさう見えたのか、それには違ひないけれども、ほんどうの所それがね、蠕動的に見えた、と云つただけでは恐ろしくはないでせうが、蛭か毛虫が頬から頭に這ひ上つたやうに見えたと云へば多少誰でもないやな氣持ちがしませう、又は十二三匹の百足が髪の毛の中を掻きむしるやうな毛の戦き、一寸身震ひが附きさうです、それで僕がさう思つたかと有仰るのですか、まアお聞きなさい、僕は實際その髪の毛を見て飽く迄も呪つたのです、あゝ嫌な髪の毛、煙となつて消えてなくなれ、燃れた後は焼野ヶ原となつた方が未だ救はれる……、で凝つと目を睥つてその髪の毛に呪咀の言葉を浴びせて居ると、全く驚ろきましたね、その髪の毛の一本々々がそれ〴〵皆蚯蚓に見え出したのです、それもあなたは山蚯蚓を見たことではないでせうが、その山蚯蚓なんですね、太きは子指位はありませう、元來は濁つた薄赤い色をして居るのですがね、それが腹一杯土を含んだ時の醜さ、そいつがあなたの顔の周圍にぞろ／＼と下から上に這つてゐるぢやありませんか、自分は頭がかつとした、さうして大聲で叫んだのです、『どうかM子さん、さう私を惱まらずに置いて下さい、あなたは何時魔術を覺えたのです、どうかM子さん、許して下さい、決して決してあなたの髪の毛を呪

ひはしませぬ、あなたの頭が焼野ケ原となれとは以ての外です、矢張りあなたの頭はあなたの髪の毛で飾られて居るのが眞固です、私はそれに一指をさせる資格がない、私は今迄通りあなたの髪の毛を漆のやうに美しく、絹のやうに滑かなものだと言います、信じなければなりません、信じなければ私は苦しいのです、私は今迄あなたの全部を愛しました、完全だと思つて居ました、所が今不完全が突然現れました、私は腹立たしい、瞞されたのが悔しい、併し此の場合の忿怒悔恨は私の全部の滅却を意味するやうに思はれる、私は亡びなければならぬ、それが堪えられることだらうか、アノM子さん、どうか私が此所に來合はしたことを許して下さい、吃度私は此の場の事を永久に忘れますから——併し忘れられるか、——私は弱い人間なんです此の場合の事は忘れられないにしても二度と此の場面を私の目の前に造つて下さらぬやうに、それだけが私の願ひです、その願ひのために私はあなたの美を信じると云ふのです、何と云ふ貴い交換ぢやないですか、併し言つて置きませう、若し此の場面が繰返される場合があつたならばその時は必ず此の山蚯蚓を刈り盡してしまはなければ私の心の中の呪咀の塊が鎮りますまい、その結果焼野ケ原とならうとも、あなたと私との間が絶縁されやうとも、それは問題ぢやないのです、私が悪んで居るのはその毛だけなんです、毛だけがなくなればそれで私の心は満足する、と云つてその後に残つた焼野ケ原を愛するかどうか、其所迄は未だ考へない、考へる違がないのですから、只今度見たらその瞬間にあなたの髪の毛一本残らず、いや／＼私があなたの山蚯蚓を退治してやるのですから、その嫌な山蚯蚓を、未だ動いて居るな、ね分りましたか、それだけはよく注意して呉れぬと二人の命の問題ですから、ちや今日は斷念して置かう、併しM子さん、あなたは何故さう山蚯蚓を蠕動させるのです、あなたがその山蚯蚓を私に見せたのは今日が始めてなんです、始めて

嫌なものを私の眼の前に展開したと云ふのは慥かにそれはあなたの罪なんです、山蛭蚓の醜惡の罪とは別なんです、あなたは何故又さう烈しく蠕動させるのです、後世ですからねM子さん、あなたがそれを今迄見せなかつたのもあなたの魔法ならば私の眼の前に蠕動させて見せるのも魔法に違ひないのでせう、そんな魔法を何時又習つたのです、M子さん後世ですからその魔法で動くのだけは許して下さい、動かなければ刺戟も小さいでせう、ねごうか動かすのだけは許して……、

私はその時じつと手首を掴まれたのです、そしてぐん／＼と力を込めて引張られて行きました、到頭蒲團の上に坐らせられて、其所がM子さんの部屋だと氣の附いた時に、あなたは私の向ふで疊の上に伏せて顔をばしつかと袖で抑へて泣いて居たのです、私は氣が附いてその蠕動して居つた山蛭蚓を覗いて見たが、最早そこにはさる影もない、肩から耳から疊の上に一面にあなたの髪の毛は掩ひ被さつて潺々と顫へて居たのです、いかにもかよはい顫へです、如何にも遺瀨ない戦きです、微かな歔歔聲も混つた、實は私の臉も幾何か震へたのです、若葉の光も暖かさうに部屋に満ちて居る、と遠くの方で納豆屋の聲が聞える、僕は感傷的な氣分になつて体を屈げてその僕に一番近い疊の上の髪の毛の一端に接吻したのです、さうです僕は實際その髪の毛を噛みめて暫くは我を忘れて居ました、何故ならば其所には變りのないいつものM子さんが手を擴げて待つて居つたのですもの、併し次の瞬間に僕がその儘顔を上げてあなたの様子を見た時に私は又も全身の戦慄を禁じ得なかつた、夢は何所迄も夢であつた、醜は何所迄も醜なんだ、自分の前に横へられたあなたの髪の毛は泥田の中に棄てられた腐れ猫の醜惡を表象するに最も完全なものである、一目見て嘔吐を催します、その上に斑な汚點をなして塗られてある染藥の惡臭は直ちに眩暈を起させるやうです。私はセンチメ

ンタルと云ふものゝ悲哀を感じました、醜い現實から只一寸した詰らぬ朝風にそよぐ女の髪の毛と云ふものゝその顫動の微妙さに疊惑されて一寸頭を突込んで見たセンチメンタルの境涯からごしんと突き返されて、謂はゞ嫌惡の上に嫌惡と積み重ねてぐんぐんと抑へ附けられるやうな氣分です、私は譯もなく腹立たしくなつて次には悲しくなりました。

「M子さん、今日は妙に不愉快な日です、又出直して参りませう、」

考へると妙なものです、是がお互の始めての會話だつたのですから、時間にすれば始めから此所迄は僅かなものなんです、盛んに無言劇を行つて相當に疲れて來た二人が別れの挨拶をして分れるとすればそれはマア不自然ではないかも知れませぬがね、で兎に角御存知の通り當時はあなただけの用件で未だ勝手に出入して居なかつた時分ですから、で兄さんの所へ行かうと思つて立ち上つたのです、するとあなたが兩方の頬に涙を平行さして顔を上げて、さして悲痛な聲で有仰つた。

「Yさん、待つて下さい、羞恥に泣いて居る女の口から言葉の出る迄此所に居て下さい、」

僕はその聲の悲痛と云ふためではない、來るべき終局を看ずして立ち去らんとするその卑怯に對する勁適な一喝に依つて立ち止りました。

「どうぞお坐り下さい」

落ちて着いたあなたのその言葉振りは慥かに一種の驚畏でした。

所が生憎其所へ阿母さんが入つてゐらつして、私の落ちて着かぬ腰が妙な具合に安定を失つてうろ／＼するし、いや／＼夫れ所ぢやない、あなたが泣顔を隠さうとしている／＼な仕草をして見せたあの時の無言劇

は始めは喜劇から終ひには悲劇に終つた混雜したものでした、何でも阿母さんが、

「餘り狎れ慣れしいことをするものぢやありませんか、殊に女の癖に殿方の前にさんばら髪の帯解けで、何と云ふ態なんです。」

と仰有つたのは些つと僕も叱られて居るやうで面白くなかつたから今でも覺えて居りますが、あの時分からそろ／＼雲行きが怪しくなつて來ましたね、

「でも／＼」

なんて口の中で云ひながら大分時雨れて來たと思つて居ると後はさつと云ふ大夕立です、弱つたのは僕一人です、暫くは阿母さんと睨み合ひでさ、どう云ふ風に何う挨拶して外へ出ましたか、全く覺はありませんが、兎に角兄さんが連れ出したものらしいのです、外は早や初夏でした、草の香がしきりに薫りました、道は固く乾き切つて居ましたが、何所を何う歩いたものか上野の森が眞近く見える所迄二人はゆつくり歩きました。

「若葉が咲いてるね」

「うん、陽炎が躍つてるやうに見えるぢやないか」

妙なことを言つたものです、暫く沈黙が続いた後突然兄さんが申しました。

「不完全な髪の毛を持つた可愛い妹を有つ兄の心が解るかい」

「不完全を始めて知つた僕の苦しみが解るかい」

兄さんは突然立ち止まりました。

「むー、分るからお願ひするのだ、どうぞその不完全を旨になつて掴んで呉れとね、世の中はよく出来て居る、完全を漁れば不完全も掴む、卑近な例だが大きいと思つた餡棒が弟のより小さい、淋しい心だね、君には解るかい、所がその淋しい心に比べてだね、よいか、始めは不完全なものだと思つて貰つたものが、假令漆塗りでも鍍金でも、全くそれが自分のものだ云ふ悦びの生する場合にその不完全は漆塗り或は鍍金したと云ふことだけだと知つた時だ、其の時の喜び、それが眞の幸福ぢやないだらうか、不完全を完全として見たがる世の中だ、ね君どう思ふね、僕のお願ひは解つたらうね。」

「おい一寸待て、その漆塗りを貰はふと、その鍍金を貰はふとそれは別問題なんだ、君の云ふ願ひと云ふのも解つて居る、それはその兄さんと云ふものゝ御心配なんだ、それで僕の問題とする所は山蚯蚓だけなんだ、解るまいね、解らんでも終ひ迄聞いてしまへ、山蚯蚓より外に言ひ様がないのだから、所でその山蚯蚓をだ、それをM子さんが一生懸命に庇つて鍍金して居る、山蚯蚓——大抵解るだらう、今日の事なんだから、それは女だもの嫌なものは見せたくない、それは分つて居るが、併しだね君、よく考へて見たまへ、あの山蚯蚓を金ピカに鍍金してそしてその上に素絹のベールでも被つて興入れをしようと云ふのだらうけれどもそれはもう僕の許せる所ぢやないのだ、ね君今日のM子さんを見て見給へ、あの謹嚴な温厚な女が今日は蛇のやうな光つた眼をして僕を睨まへたし、蝸のやうに僕の心膽を脅かして居る、何所にいつもの彼女があるのか、それはまアそれ程彼女が此の事件に就て慄へて居ると言へばそれは實際御氣の毒でならぬのだが、併し考へれば考へる程あの髪の毛は、今日は不思議な機會にすつかり知つちやつたのだが、その僕の苦しみ、解ると言つても君にはどれ程解つて居るのか、ねK君、僕は迷つて居ると云つても君なら勘辨して呉れるだらうね。」

私はちらと兄さんの顔を覗き見た、兄さんは地面を見ながら静かに歩いて居ました、私も視線を落しました、そしてぼつ／＼と續けました。

「それはね、見ずして済んだと云へば夫れ切りなんだ、僕だつて一度はM子さんと對座して居る時には二度とその現實を見ない限りは圓滿だらうと考へた瞬間もあつたのだがね、冷靜になつて見ると……、K君、どうして僕は斯うなんだらう、男らしくない、許して呉れ。」

私はもう何とも言へなくなりました、兄さんは始終黙つて居ました。

上野の森の櫻の樹蔭に休んだ時に上を見上げたら櫻坊が大分色附いて居ました、足許の木蔭葉蔭は遠く波紋をなして瞬きして居ました、兄さんは悲しさうに見えました、併し私は何時迄も何時迄も山蚯蚓のことを考へて居ました。

その翌日あなたから手紙を受取つた私はK、M子と書いた封筒を見詰めながら是が彼女から來た始めての手紙なんだ、と云ふ感じに大分の衝動ショックを受けたのは事實ですが、それよりも來るべきものが來たのだと云ふ落着いた感じのために直ぐに僕は平靜に歸つたことも事實です、併しM子さん、僕がその手紙を讀んでしまつた時の感情はそれは逆も述べることの出來ない蕩然たるものであつたと共に又貴い美しい感情であつたことも序に茲に白狀して置かなければなりません、私は甦つたと感じました、自我の復活だと叫びました、さうしてその手紙を三度讀み通しました、今だから申しますが僕はあの日は山蚯蚓のために祟られてその前夜からの頭痛が益々劇しくなつて居たものですから學校にも出ずに臥つて居ました、外は何時頃から降つた

か雨が滌々と降り灑いで居ました、如何にも泪ぐましい日です、僕はあなたの手紙を読んで泪の出ない譯がないと思つておつびらにして拭ひもしなかつた、M子さん、僕は今それを思ひ出して懐しく思つてる證據にもう一遍茲にあなたからの手紙を書いて見てもう一遍泪が出るなら出して見たいと思ひますが構はないでせう。

Y様、私は今あなたに手紙を書かうとして居ります、母の寝た間、兄の軽い鼾を聞きながら筆を走らすと云ふことは餘り美しいことだとは決して決して思つて居りませぬのに心の恍惚うつろひとして春の夜永の歡樂に疲れたやうな心持ち、何としたことでございませう、絶えず机の上のオキザリスの花に接吻くちづけして居ります、此の前の病氣の時に頂きましたのね、Y様、嫌なことではありますが、順序として申し上げねばなりません、貴方は今日の出来事を何と思召してゐらつしやいますか、それを知ることにも出来ませず、又私の考も一言も申し上げずにお別れ申したことは呉々も残念に存じます、あれから後の場面シーンの變化は何うなつたと思召します、私が人様と面と向つて顔を向けることの出来ない女であると云ふことは始終頭にこびり附いて居ります結果として何時も羞恥と云ふものを前提として振舞はなければなりません、随つて其所に現れる私と云ふものは纖弱な影の薄いよく言へば溫厚な女に見えると云ふことは人も言つて呉れますし、私もそれは自然だらうと思つて居ります、それがあの場合如何にも莫迦らしいものに見えた、と云ふよりもその虚偽の生活に嫌惡を覺えました、私の眞實をあなたに告白するのは此の場合より外にないと感じました、考へると失禮をいたしました、どうぞ御免遊ばせ、で私は常から思つて居ります、他の娘達のやうに人の前でも驅けて通つたり、人

と混つて笑ひそめたり、せめては面を向つてその腫を膝の上に落さずに始終微笑んで話をしたいと、考へればそれは缺點と云ふものを意識しない快活なる生娘にのみ與へられる賜でした、私にはそれを考へて見る資格もありませぬ、私は誰を恨むことも出来ませぬ、阿母さんの膝に凭れて思ふ様泣きました、阿母さんも泣いて呉れました、私はふと思ひました、神世の時代に二人の男女の神があつて、夫婦の契を結んだ楽しい夢の未だ醒めやらぬに、女神から一日の暇を賜るやうに願ひました事、貴方は御存知でせう、何と云ふ名の神様でしたか、亂れた頭には逆も思ひ出させぬ、それから到頭女神は去りましたのね、固い約束をして、所が男神は女神の戀しさに約束を忘れて戸の節目から女神の安否を窺つたと云ふのですね、女神は直ぐに飛び出して男神を幽冥の國迄追つたと云ふこと、是で話はお終ひでございますが、私は只その蛇の身体を見られた女神が追つかけて、それに嫌惡を感じた男神が地獄に墮落する迄逃げたと云ふ、その追つた女神、逃げた男神、男神の心は只單なる恐怖としか思はれませぬが、追つた女神にはもつと純な神祕なものがあるやうに思へてなりませぬ、可愛い心があるぢやございませぬか、私は悲しくなつて參りました、御免遊ばせ到頭紙を濡してしまひました、私だつたら…何故男神が止つて呉れなかつたのでございませう、何故男神が耳を籍して呉れなかつたのでございませう、私だつたら…男神の頸の骨の折れる迄も接吻して、見たい、御免遊ばせ又濡しました。

Y様、私は今私の不幸に就て歎いて居たのでございませぬ、さうして母様も泣いて呉れたと申しましたのね、眞箇に阿母さんも兄さんもよく私を愛して呉れます、そのいちらしい言葉には時々夕闇の中に立つてそつと涙を抑へる時もございます、私にはその譯もよく解ります、どうぞもう暫くです讀んで下さい、それを

話せば私の不幸に就ての一分始終をお話し申すことになるのでございますから。

話は三年前のことでございます、コスモスの花が衰へるのは秋の終りでございましたね、その頃私の父がチブスに罹つて或る病院に入院して居りましたが、私は父がいとしくていとしくて看護婦任せには出来ぬのでございました、白い看護服を着けまして、そして何時も嗤はれましたが白いコスモスを胸の所に一花挿してそして父の看病をいたしました、父も大變氣に入つたと見えて笑つて居ました、五日経ち六日経ち、いたしました、どうでございませう、父の微笑も最早や見られなくなりました、私は心配いたしました、併し益々看病には精が出ました、落日が病院の西側の磨硝子を照して廊下一面に金の波が漾ふ時私は何時迄も立つて永いお祈りをいたしました、それが行く人の眼を惹いたとか、併し神様の御目には止らなかつたのでございませうか、私の父は二週間目に到頭果敢なくなりました、私の悲しみはそれだけではございませぬでした、私は葬式にも列することゝを許されなかつたのです、私の身体に熱がございましたので私の知らぬ間に葬式は済んださうでございしますが、その翌日私は同じ病院に今度は病人となつて送られなければならぬ運命にあつたのです、母も兄も泣きました、私が泣いた時に顔を反けました、それでも病院では同じ看護婦が親切に世話して呉れました、コスモスの花を活けて呉れましたのは嬉しいございしました、入つてから三日目に父の病氣と同じだと聞かされた時に私は妙な快さを感じましたのは何うしてゝございませう。

話は是以上續ける必要はございませんまい、生理的にチブスの後には髪の毛が脱けることは御存知のこととございませう、私は續く不幸が具体化して最後に私の肉体上に止めを刺したことを自己的ではございませうが此上ない悲しいことゝ存じます、私は亡くなつて行く父に亡びぬ痛手の犠牲を拂ひました、嬉しい時もな

いでもありませぬけれども心から恨に思ふ時もございます、其所が女かと思つて悔しい思ひもいたします、兄も母も私の心はよく存じて居ります、よく愛して呉れます、よく慰めて呉れます、私は之を此上ない償ひとして此上とも亡き父に對する奉仕を完うし母に對しても兄に對しても同じ心を以て奉仕したいと思つて居ります。

Y様、貴方に對する私の虚偽は凡てお許し下さい、今日端なくも私の虚偽の一端は破れました、一つ一つが破れて行く、それは堪へられさうにもございませぬ、私は遂に虚偽の犠牲とならなければならぬのでございませうか。

切つた竹の節にも芽が萌えます、之を虚偽だと誰が申しませう、萌へ出た若葉を押隠して芽が出ないと云ふのは虚偽でございませぬ、あゝ私は母や兄に迄虚偽でございませぬ、私は竹の葉ひしよなを育みたくございませぬ、それは虚偽ではございませぬ、育み得ました時は其所にも虚偽はございませぬ、誰が虚偽を欲しませう、乙女は純白のコスモスが好きでございませぬ。

M子さん、此の手紙は何所か濡れて居りますよ、約束通り涙が出たのは面白いですね、併しまゝ涙を出して面白い云つて居られるやうになつた二人は幸福ですね、あなたの病氣が治れば一層の幸福が待つて居ますよ、であなたの手紙を借りて昔の思ひ出でを語つた代りに其頃の私の日誌を少し出して見ても又面白い思ひ出になるかも知れませぬね。

五月〇日 Mの手紙は虚偽ぢやない、掩ひ被せても眞實が出て居る、散漫な態度だ、眞摯な言語だ、山蚯蚓は遂に山蚯蚓ぢやなかつたのだ、犠牲の標だ、金髪だ、俺が明けの光を望む心で再びMを愛することの出来るやうになつたに就てはMに對して感謝する、全く俺は甦つたのだ、復活したのだ、可愛い葉を育みたいと云ふ純白のコスモスの好きな乙女の清い心の前に山蚯蚓が何が出来たものか、センチメンタルな接吻は萬事を豫言して居たのだ、何と云ふ氣持ちのすが／＼しい晩だらう星が瞬いて居るな、明日は學校へ出るぞ。

五月〇〇日 所謂虚偽だつた例の髪の手を今日は俺の前でMが染めて見せた、綺麗になるものだな、Mの顔には羞恥の影もない、嬉しさうだ。

六月〇日 今日は俺が染めてやつた、鏡の中で眼と眼とかち合ふのは變なものだな、浴衣に二三點汚しみを附けたのは失敗だつた、それでも思ひ出だつて云つたね。

七月〇〇日 學校も済んだ、伊豆へでも行きたいね、Mは行けないと云つたのは何故だらう、修善寺の水は綺麗だつたな、行くかな、

八月〇〇日 K君は今日東京へ歸るのたさうだ、承諾の返事をして置いた、Mがどう云つて来るだらう、箱根ももう一週間だな。

× × × × × × ×

Y氏は鏡台の前で穢い油の附いた舊い自分の手紙を繰り廣げて居たが／＼と丸めて抽出しの中に押し入れてから顔を顰めながら又ぞ／＼と髭に剃刀をあて始めた。

(終)